

必ず良いことがある人のために送る！
DAICHIKUのお得意様向けニュースレター

ウラ面も情報満載

【発行日】2008年4月1日 【発行人】大築窯炉工業 谷口浩司
〒309-1611 茨城県笠間市笠間2192-5 TEL0296-72-1444【ホームページ】http://www.daichiku.jp/

ユーザーさん登場 さとうゆきさん“工房てん”主催



ご愛用の0.4m³台車式ガス窯

秋元: 幼い頃はどんなお子さんでしたか？
さとう: 自然が大好きでした！アリの行列をずっと観察したり、植物を観察したりよくしていました。

秋元: 心に残っている家族との思い出はなんですか？
さとう: 親が農業を営んでいるため、昼も夜も働く姿を見て小さい頃から仕事の厳しさ大変さを感じていました。

秋元: どんなときにやりがいを感じますか？
さとう: 料理も好きで、料理を盛り付けて始めて完成される器づくりができたときに喜びを感じます。‘さりげない美しさ’を器に求めます。人に使ってもらって喜んでもらえるのが何よりうれしいです。

秋元: 今の目標や達成したいことは何ですか？
さとう: 自分の腕をもっともっと上げたいです。陶芸教室をすることで日本の工芸の良さや、手仕事の楽しさを再発見してもらいたいです。ご自分が作ったものを使うことができる楽しさを伝えたいです。やきものを通して人々と感動したいんです。

楽しんでいただければうれしいです。



秋元: そのためにはまず、何をしようとお考えですか？
さとう: 生徒さんと同じ目線でやきものの楽しさを味わうことだと思います。

秋元: どうして弊社の窯をお選びになりましたか？
さとう: 益子にいる時から評判は聞いていました。窯を購入するなら“だいちく”の窯だ！と思っていました。

秋元: “大築窯炉”のイメージは？
さとう: 窯のスペシャリスト、専門性があると思います。

窯に関して分らないことは何でも応えてくれそうな気がします。

秋元: 陶芸の魅力はどこですか？
さとう: 学生時代、ワンダーフォーゲル部であちこち山に出かけていました。近くにやきもの産地があると必ずやきものを見てきました。備前焼や小鹿田焼も好きですが、益子焼は民芸の暖かさがとても良く、やきものの感じが柔らかいのでとても好きでした。

秋元: ‘つかもと時代’の思い出は？
さとう: ‘つかもと’さんでは先輩方にたいへんお世話になりました。特に先輩のTさんに一ヶ月ほどで実演ができるまで仕込んでもらいました。たいへん感謝しています。陶芸教室担当のときは多くの人と接し、たくさん粘土にふれ口口を回したことで、粘土の感覚をつかむことができました。

秋元: その後、西村俊氏に弟子入りしたと聞きましたが。
さとう: 弟子入りさせていただいた1年間、今まで学びきれなかったことをたくさん学べました。作家としての心構えなども西村さんと一緒に仕事をさせていただくことで身をもって実感できました。仕事をなかなか始められずいたときも励ましてくださったりして、西村さんにはたいへん感謝しています。(敬称は略させていただきました)



陶歴
一九九九年 福島県生まれ
九二年 文化女子大学
エッセイ「サイコロス草」
益子焼窯元「てん」を立ち上げ、
陶芸教室を主宰する傍ら、
九六年 西村俊氏に師事
九七年 青年海外協会の
陶芸器製造員として
グアテマラへ派遣
二〇〇〇年 帰国
二〇〇七年 植葉町にて独立



陶芸教室も兼ね女性らしく整えられた工房

【連絡先】
さとうゆき「工房てん」
福島県双葉郡植葉町下小楯府の内1
0240-25-3919

ユーザーの個展・展示会の情報募集
当社ではユーザーの個展・展示会の情報を募集しています。ダイレクトメール(DM)などの案内書ができましたら、弊社までお送りください。当ニュースレター「月刊・窯ナビ」やホームページ上でご紹介させていただきます。グループ展や小さなイベントでもOKです。どしどしお寄せください。費用は一切かかりません。

お客様に学ぶ今月の格言！
「楽しんでいただければうれしいです」
【楽しいと思うことが行動の原点、身近な人々と一緒に同じ目線で楽しむことがうれしい！】

うれしい！楽しい！大好き！ダイチク！メッセージ！
さとうさんは大学時代と社会人になってからと2度協力隊に挑戦し、97年3度目にしてやっと実現したそうです。2度の失敗さえ乗り越えて社会貢献したいと思いつけるのは、佐藤さんならではないかと思えます。その不屈の精神と優しい気持ちで陶芸の楽しさを伝えてください。「謙虚にならなければ、物事の本質は見えない」といいますが、「楽しむ」という言葉はさとうさんの謙虚な人柄からでた素直な気持ちだと私は思います。

さとうゆきさんのグアテマラ体験記

苦勞して作った“ドラム缶窯”!!!

私は1997年から3年間、グアテマラのラピナルというところに陶磁器隊員として配属されました。仕事は日本の陶芸技術を教えることで、施釉して使える陶器を指導するという目的でした。というのも、現地のやきものは素焼き程度のものにペンキやニスで装飾したみやげ物が多かったからです。窯は新窯で800度位しか上がらない原始的なものだったので、温度を上げることに本当に苦勞しました。ガスバーナーで温度を上げようともしました。ドラム缶窯を試行錯誤の末作ってもみました。グアテマラでは長い内戦の時代がありました。その後遺症から内気な人々が多かったのですが、ガス窯の実験に失敗したときは「あきらめちゃダメだよ!」と現地のリーダーから逆に励まされたこともあり、そうしたこともあり、2年の任期をもう一年延長させてもらい、ドラム缶窯で焼くことに成功しました。その後ガス代が高騰したので、私たちがつくったドラム缶窯が活用されているかどうか心配です。グアテマラのことを思い出すと、やりのこしたことが沢山あるので「どうなっているんだろう?」と気になってしまいます。言葉の壁や日本とはあまりにも異なる陶芸環境に戸惑うこともありましたが、思い返せばすべて良い貴重な経験だったと思います。

グアテマラの自然に感動!そして...

グアテマラの自然は本当に忘れられないくらい素晴らしいものがあります。雨季と乾季があり、乾季には6ヶ月くらい雨が降らず、景色は茶色一色になってしまいます。ところが、雨季に入ったとたんそれまで土の中で眠っていた植物たちがいっせいに芽を吹くんです。視界が別世界に変わる瞬間、それがとてもきれいで感動的でした。その後帰国したとき、今度は「家族や身近な人々の力になれるように!」と思うことが、日本での新しいスタートだと感じました。



グアテマラ共和国(グアテマラきょうわこく)は、中米の国。首都は、シウダー・デ・グアテマラ(グアテマラシティ)。太平洋とカリブ海の両方に面する。北にメキシコと、北東にベリーズと、南東にホンジュラス、エル・サルバドルと国境を接している。中米で最も人口の多い国であるが、市民の過半数はマヤ系の先住民族である。さとうさんのいたラピナルはほぼ中央にある。



国旗



国章

グアテマラ共和国一〇メモ

人口:1,420万人(世界第62位) 面積:108,890km²(104位) GDP:世界第66位 公用語:スペイン語

陶芸羅針盤 人間国宝・荒川豊蔵

「志野」「瀬戸黒」の人間国宝、荒川豊蔵(明治27年~昭和60年/1894~1985)は、昭和を代表する陶芸家のひとりです。岐阜県多治見市出身の豊蔵は、京都宮永東山窯の工場長を経て、昭和2年(1927)北大路魯山人の星岡窯に勤めます。そして昭和5年(1930)、現在の可児市久々利大萱で、志野の筍絵筒茶碗の陶片を発見したことから、志野、黄瀬戸、瀬戸黒といった桃山時代のやきものが美濃(岐阜)産であることを実証し、以後、大萱に窯を築いて桃山の志野復興に生涯を費やします。昭和30年(1955)には国の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定され、また、昭和46年(1971)には文化勲章を受章しました。(茨城県陶芸美術館パンフレットより抜粋)



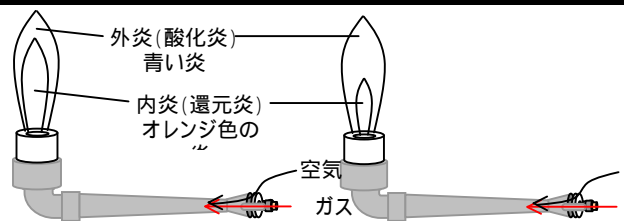
人間国宝 荒川豊蔵



茨城県陶芸美術館
人間国宝
荒川豊蔵
偶然か、宿命か
-志野にロマンを追いかけて
平成20年
4月19日[土] -
6月22日[日]

予混炎と拡散炎

前回は、「予混合燃焼」と「拡散燃焼」についてお話しましたが、今回は「予混炎」と「拡散炎」についてお話します。予混炎(よこんえん)は一般に気化燃料においてバーナー内で空気と燃料が混ぜられ、その結果得られた炎です。空気を十分取り込んでいる場合は酸化炎で、空気を絞ってゆくと徐々にオレンジ色を呈してゆき還元炎になっていきます。これに対して拡散炎(かくさんえん)はろうそくの炎や薪の炎で、燃焼に必要な酸素を炎の外側から供給される場合を言います。拡散炎は酸化炎の外炎部分が少なく全体として還元炎となります。ガス窯で使用されるベンチュリーバーナーでは、空気量の調整で酸化炎から還元炎まで無理なく調整できます。酸化焼成をする場合は酸化炎で、還元焼成をする場合は還元炎で焼くと焼きあがりも安定します。



【空気の取入れが少ない場合・還元炎】
内炎はオレンジ色で大きい還元炎。
外炎は少なく青い酸化炎。

【空気の取入れが多い場合・酸化炎】
内炎のオレンジ色はほとんど見えません。

トピックス 健康診断を実施



医療法人 陽気会
とちの木病院・総合検診センター
栃木県栃木市大町39-5
0282(22)7722内線160

3月24日、栃木市の「とちの木病院」にて健康診断を行いました。スタッフの年齢、性別、気になるところに応じて定期的に行っています。私たちがこの病院で健康診断をするのは、父がお世話になったこと、病院内の福利厚生に陶芸を取り入れるなど、やきものに関して興味をおもちで、益子から陶芸家を講師として迎えていることからです。しかし、なによりも医療に対する理念にあります。それは「私たちがこの世に生を受けた時から、病気になることは、誰もが避けがたい試練であると思います。今日の医療技術はめざましく発達し、私たちは多大の恵を受けました。その反面、人の心が何処かに置き去りにされたことも否めません。患者さんが試練に立ち向かう時、「人の情愛を携えた医療」を行えることこそ最良であると思います。職員一同その信念に向かい歩いてゆきます。」(パンフレットより)ということで分ります。さて、陶芸家の皆さん、健康診断はどうですか?「最近やってないなあ...」という方はここで是非いかがでしょうか?

編集後記「あとかんげん」

2005年6月、なぜポルトガルなのかということとは別に、私もやきもの屋のむすこ、知らない国をただぐるって見て廻ることはたくありませんでした。陶芸の産地があればそこを見たいと思い、「レドンド」という村に行きました。人口は数千人だと思います。陶芸家は10件ほどでした。ほとんどが家族経営ですが、2、3件は工業的にやっているようです。とはいえ大きい窯は2mほどのガス窯で、ほとんどが10kw位の電気窯でした。1件目は妙に陽気なおじさんが、こっちへ来い!と呼び止めるので行ってみると、真っ黒にスつけた薪窯を見せてくれました。2件目は電気窯、日本の温度計が付いていました。3件目はガス窯、4件目はまた電気窯でした。そこでは何とシンボの古い電動ロクロが現役で働いていました。「これ日本のだよ!」と通訳をしてくれたT氏にはしゃいで話していました。レドンドのやきものは最高温度が1,000位で、日本で言えば楽焼より少し高いくらいです。などなど、これが私の唯一の海外体験です。